

江戸時代の喫茶道具

西 村 俊 範

はじめに

江戸時代の喫茶に用いる道具には、茶を作る土瓶・急須・薬罐と茶を飲むための茶碗・湯呑以外にも、様々なものが用いられていた。当然のことながらそれらは、その当時の茶の種類・飲用法とも連関するものであることは疑いない。本稿では、画像資料・文献資料の両面からいくつかの喫茶道具を取り上げて、それらがその当時の茶の種類・飲用方法とどのように関わっていたかを探ってみたい。細かな道具類ではあるが、その有り様を通じて、筆者が示した庶民の茶の辿った道筋の裏付け・傍証となることを目指している⁽¹⁾。

1. 茶入れ(茶壺・茶箱・茶筒)

茶入れは飲用に供する茶葉を入れて保存しておく容器である。葉茶屋の店先に並ぶような大型のいわゆる葉茶壺(図1)⁽²⁾とは異なり、茶を飲用する場所に常備されて頻繁に出し入れが行われる日常用の小型品である。西邨貞『幼学読本』(明治14, 1881)に「火鉢のそばにあるは茶筒と茶飲み茶碗となり、あの茶筒には茶が大分に入るべし」とある「茶筒」がまさにこれに当たる⁽³⁾。茶を飲む際の必需品として釜・火鉢や薬罐・土瓶・急須の周辺に必ず存在するはずのものである。従って画像資料にも120例近くとかなりの数の例を確認している。その特色としては、時代の推移とともに器形の



図1 『紀伊国名所図会』後編 巻6(南部駅)
より(嘉永4年〈1851〉刊)西村作図

変化が極めて大きいということが挙げられよう。

17世紀

江戸時代の前期の17世紀には、茶釜の横に棚などの何らかの設えを設けて、茶碗などの道具を並べた画像が多数認められる。もちろん描画の中心は茶碗に集中

するが、其の脇に小型容器が並ぶ例がいくつかある。(図2)こういうありふれた形の容器は16世紀の茶の振り売りや座売りの行商人の道具の中にもよく見受けられるもので、つまみのついた蓋つきのもの(図2左)は陶器か木器かのどちらかであろう。⁽⁴⁾黒く塗られた四角形・円筒形の蓋物風のものの(図2中・右)は、⁽⁵⁾絵画表現的には漆器によく見受ける表現方法である。確証は示しにくい、これらが茶葉の容器であった可能性は極めて高からう。



図2 左：菱川師宣『絵本吉原恋の導引』(延宝6年〈1678〉刊)、中：西沢一風『新色五卷書』巻二(元禄11年〈1698〉刊)、右：中村某撰『奇異雑談集』巻二(貞享4年〈1687〉刊)いずれも国立国会図書館蔵

18世紀

18世紀に入っても、茶を作る茶釜の周辺の描写には、茶店であっても一般家屋内であっても、17世紀と比較して「大きな」変化は認められていない。ただ、前稿で示した通り、宝永期から茶筴の表現が激減する点のみが大きく異なっている。茶碗の脇には、相変わらず黒塗りの漆器かと思われる

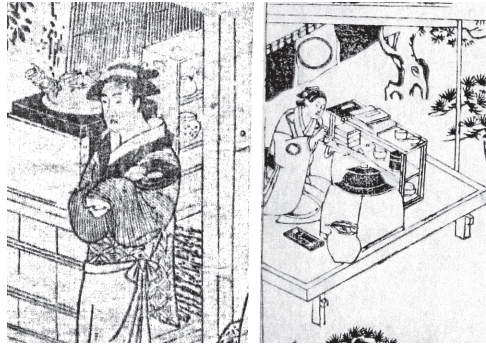


図3 左：山東京伝『真実情文桜』（寛政元年〈1789〉刊）国立国会図書館蔵，右：西沢一風『似勢平氏年々分際』巻四（享保13年〈1728〉刊）早稲田大学図書館蔵

容器が認められている。（図3右）ところが18世紀後半に入ると、今述べてきた木漆器風容器の表現は見当たらなくなり、代わって明らかに陶器製と思われる小壺が茶棚などに並ぶようになる。（図3左）小さな黒点を密集して入れて、表面が平滑でないことを表している。この小さい壺は後述するように間違いなく茶葉の入れ物であることが確実で、従って入れ替わるように姿を消す先述の木漆器風小型容器が茶葉を入れていたこともさらに蓋然性が増すこととなる。

小壺は蓋がされている。木製かと思われる平らな被せ蓋を伴うか、端が波打って周囲に大きく広がる表現のものを口⁽⁶⁾に被せた例も認められている。（図3左・4）布か渋紙の類と想定できる。ただし18世紀にはまだまだ類例は乏しくて数例しか確認しておらず、画工たちも茶屋や茶釜を表現する際の必需品とはみなしていなかったようである。た



図4 神真人序『大きにお世話』（安永9年〈1780〉刊）より西村作図

だ、この時期は庶民の茶の上質化が顕著になる時期であることから、この小壺が上質の茶葉の販売用容器であったことは十分に考えられよう。

19世紀

19世紀に入ると状況に変化が生じている。まず、小壺が表現される頻度が著しく増加する。明治までの70年弱の間で絶対数で60例以上を確認している。この程度の数では時代ごとの増減はまだ計りがたいが、継続的に用



図5 錦盛画『新板世帯道具尽』(部分)(安政期〈1854~60〉)公文教育研究会蔵

いられて遅くとも明治に入ってから使用が減少している可能性が高い。そのことは、日常生活用具類を一同に描いた安政期ごろ(1854~1860)の「新板世帯道具尽」(図5)と江戸末期から明治初期の「勝手道具尽」(8)にいずれもこの壺が描かれていることから窺える。肩の張るものと胴が張るものがあるが、形態的特徴はさほど顕著ではない。蓋の形も18世紀のものの継続で、木製あるいは漆塗りと思われる被せ蓋のものと、大きな紙・布を被せて紐で結わえるものとがやはり併存している。

いずれにしても容器としての密封性は著しく劣るはずであり、これでは茶葉が湿気ることは避けられない。小宮山楓軒『懷宝日札』の文政2年(1819年)の条には、「茶を収むるに、台町焼の壺を渋にて紙張にして、口を紙にて包みおくに、かび出ることなし。紙は年々渋にて張るなり。」とある。(9) 渋紙を取り換えてゆけばカビは出ないかもしれないが、お茶の味を保つには決して良いものとは思えない。『民家日用 広益秘事大全』(嘉永4年、



図6 歌川国芳『縞揃女弁慶(堀川)』(天保15年〈1844〉刊)東京都立図書館蔵



図7 墨川亭雪麿『宇治拾遺物語煎茶友』中巻(天保5年〈1834〉刊)国立国会図書館蔵

1851)には「茶を久しく貯る法」として「茶壺の底にわら灰を敷き、茶を紙に包みて灰の上に詰め、壺の蓋をよくよく封じととのふべし。茶の湿気自然と灰にうつりて炒ることなけれども味尤もよし。或は灰の代に炭粉を志くもよし。」と記している⁽¹⁰⁾。様々な工夫でお茶の味の劣化を食い止めようとしていたはずである。ところが次の時期に壺以上にさらに密封性が良いはずの容器が出現してもこの壺は一気に姿を消してはいない。安手の番茶の類ではこれでも十分だったかもしれない、さらに第2章で検討する茶焙じが広く普及していたことも考慮に入れておく必要がある。歌川国芳画『縞揃女弁慶』(天保15年, 1844)では小壺に「新茶ほり川」の紙が貼られており⁽¹¹⁾(図6), 墨川亭雪麿『宇治拾遺煎茶友』(天保5年, 1834)では「宇治拾遺」の貼紙が見えている⁽¹²⁾(図7)これは銘茶の類に用いられる手法であり、この手の茶壺が必ずしも安い茶専用のものとは見做されていなかった証左となろう。(図21も参照)



図8 為永春鶯『春宵月の梅』巻
十四(天保14年〈1843〉刊)御茶ノ
水女子大学附属図書館蔵



図9 笠亭仙果『犬の草紙』二十一
編上(嘉永5年〈1852〉刊)大阪
府立中之島図書館蔵

この茶壺と併存する形で、天保頃から縦長で四角い箱型の茶箱が出現してくる。表現から見て木製と考えられる。その初現としては天保13年(1842)の人情本『春宵月の梅』⁽¹³⁾(図8)を確認している。これは茶焙じ・湯呑と並べて箱火鉢の脇に置かれているので茶葉の容器と見てまず間違いはない。この形の茶箱もこれ以後明治期まで継続して用いられている。先述の『新板世帯道具尽』(安政頃)にも『勝手道具尽』(江戸末明治初)にもやはり見えており、ほかに嘉永年間の歌川芳虎画『あづまの花 江戸絵部類』⁽¹⁴⁾にも見える。間違いなく普及していたものと言える。

この箱は、蓋がずいぶん大きく高さがある。身の立ち上がり部分が高い印籠蓋形式の蓋の作りと思われる。四隅の角が直線的ではなく湾曲して見えるような凝った作りのものがかなりあり、さらには大半のものに絵画や書による装飾が認められる。(図8・9)箱自体が安手の作りではなく独自の工芸品のような仕立てであり、中身のお茶もそれなりのグレードのも

のと見てよかろう。上茶の普及ぶりをこの茶箱に見ても良いのではなかろうか。書画の装飾となると、煎茶道からの影響を考慮したくなるが、煎茶道ではこの形の茶葉の容器は当時全く用いられていない。あくまで商品販売用としての設え・工夫であろう。

この19世紀にはさらに3種類目の容器として、嘉永期(1848～)から円筒形の茶筒が出現する。ただし、明治期までは数は極端に少ない。初現としては、柳亭種彦『邯鄲諸国物語』⁽¹⁵⁾13編(嘉永4, 1851)(図10)と、同じく嘉永4年刊行の『紀伊国名所図会』⁽¹⁶⁾の例(図1)が認められる。形だけから見れば、茶箱が円筒形になっただけではないかと思われてしまいそうだが、この茶筒には1例を除いて茶箱のような絵画・書の装飾が認められていない。つまりほとんど無文様で表

現される。これは素材の違いが原因かと思われる。装飾のないこの茶筒はブリキ製の可能性が高い。内藤官八郎『弘藩明治一統誌月令雑報摘要抄』(明治30年頃, 1897)ではこの手の筒に「慶応の頃用ふるブリキ細工 茶入れ」と⁽¹⁷⁾注書きがある。(図11右)



図10 柳亭種彦『邯鄲諸国物語』
十三編下(嘉永4年〈1851〉刊)
大阪府立中之島図書館蔵

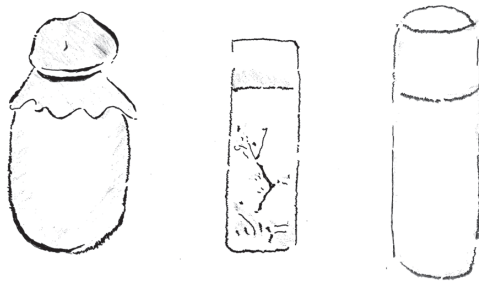


図11 内藤官八郎『弘藩明治一統誌月令雑報摘要抄』左：茶瓶，中：茶箱，右：茶入れ(明治30年〈1897〉頃)より 西村作図

また、煎茶書の清談楼主人『新撰煎茶一覽』(弘化4年, 1847)では錫製の茶壺に注して「近年ブリキを用⁽¹⁸⁾」としている。煎茶道限定かもしれないが、⁽¹⁹⁾すでに19世紀半ばにブリキが茶の容器に用いられていたことは確実である。また、全面に色の濃い細かな模様が入れられていて表面に紙か樹皮のようなものを貼った細工物かと思われる例も見える⁽²⁰⁾。

『弘藩明治一統誌月令雜報摘要抄』について

茶箱・茶筒は茶壺に比較して密封性に優れる。特にブリキ製の茶筒は現在のお茶のカンカンと何ら変わりのないものと言える。従って、その出現は茶の質への配慮・関心が然らしめたものと言えよう。この点で先述の内藤官八郎『弘藩明治一統誌月令雜報摘要抄』の茶に関する記事・挿図には再度注目しておく必要がある。まず同書には今まで述べてきた3種類の茶の容器がすべて挿図として描かれている⁽²¹⁾。(図11)その注書きを見ると、左の茶壺には「茶瓶 文政の頃用ふる所」と記す。先程に画像資料で説明した通り、文化・文政・天保期は江戸でもこの小壺が茶入れの中心であり、両者の間に矛盾を来さない説明と言える。次に中の茶箱には「嘉永の頃用ふる茶函 桐にて作り長さ八寸位」と記す。天保末が管見のものの初現であり、これも両者に矛盾がない。江戸のものと同様の絵画が描かれており、木製(桐製)と述べられる点も頷ける。桐は現在でも箆笥や文化財の収納箱として専ら用いられる優良な材質であり、温湿度の調節に優れ、大事なものの保管・保存容器として最たるものと言える。画像資料のものもかなりが桐製と見ておいてよからう。八寸位(27センチ)という高さも、画像でかなり大振りに描かれていたことと符合する。さらに右の茶筒には「慶応の頃用ふる ブリキ細工 茶入れ 長八寸位」と記す。この手の茶筒が江戸(東京)でもたくさん見えるようになるのは管見の限り明治期からであるが、許容範囲であろう。八寸位という茶箱と同じ寸法記載も頷ける。要するに、江戸(東京)と弘前はかなり距離的な開きはあるものの、茶の容器に関してはほぼ並行するような推移を示していたと見てよからう。

次に、同書の記事に注目してみたい。⁽²²⁾少し長いが非常に重要なものなので引用する。

A 嘉永期以前

飯後茶を點ず。中家以下矢筈の茶碗に初霞と申葉を赤葉罐(注・銅罐)にて煎ず。茶釜に鹽を少し附けて茶を點ずると泡が立つ、其の泡と共に之をたべるを時風とす。農家とも一般なり。…(中略)…茶ハウスと申者あり。農家は赤銅を以て仕用す。

B 嘉永期(1848～1854)

嘉永年間に至り全く廃止、薄茶(注・色の薄い茶、つまり緑茶)に転ず。是迄用ふる所は初霞茶は目方百目入り(百二十文買)現時(注・明治)の番茶なり。…(中略)…国主・寺院・商家の好景者ばかり薄茶(注・銘茶)の功名を翫ぶ。其頃迄は国老以下の中等官士或は医者・坊主(近習士の事)・寺院・社家は薄茶を用ふ。東京日本橋山本六郎兵衛一手専売する所の茶を山本茶と称し、一斤二百六十文内外なり。現時の中等茶に類す。是陶瓶にて煎じ出す。

C 嘉永末以後

后嘉永の末年キビテウ與花瓶涼爐(コンロ)と申器を發明流行し、夫より現時の茶點(注・急須)に移るも其キビテウは水一合餘入りたるもの故、大に大なり。

この記事と挿図をまとめて通観してみると、飲用する茶とその飲用方法並びに茶葉と容器が連動して変化していたことが読み取れる。すなわちまとめると

嘉永期まで一上級者は緑茶(山本茶)、陶瓶にて煎じ出す、小壺

中級以下は番茶(初霞)、赤葉罐で煎じて茶筌で点てる(塩入

り), 茶焙じ, 小壺

嘉永期以後一次第に緑茶に推移, 初めは土瓶で煎じ, 嘉永末年よりキビテウ(湯沸し)・花瓶(柄のある土瓶)・涼爐(コンロ)のセットに移行。明治期までに淹茶に。茶函(茶箱), 慶応期にはブリキの茶入れ(茶筒)

明治期一(上等茶はおそらく玉露・高級緑茶と想定)

中等茶は通常の緑茶(嘉永期の山本茶に類する)

下等茶は番茶

この推移は基本的に筆者が前々稿において江戸後期以降の茶の様相として想定してきたものと変わらない⁽²³⁾。上級階層の人々が19世紀半ばまでにはすでに緑茶を飲用しており, しかもその茶が決して「淹れる茶」ではなく陶瓶にて煎じ出す「煮茶ないし烹茶」であることも確認できる。文中の「山本茶」すなわち永谷宗円が発明したとされる茶が現在の緑茶とは全く異なるものとして描写されていることは明白である。そして, 19世紀半ばのキビテウ(急尾焼)の登場からが現在の「淹れる茶」への真の推移であり, 筆者が前々稿の急須の項で説明した変化が弘前でも同様に興っていたことが確認できるのである。

茶葉の容器に関してまとめて述べると, 容器の変化はむしろ各種の茶の普及度合いとの関連で捉えることができるのではなかろうか。すなわち, 嘉永期までの緑茶飲用者がごく少数に限られる時期のものは小さい茶壺であり, 嘉永期から緑茶の飲用層が拡大した時点でより密封性の高い茶箱(茶函)が考案されて出現してこれが緑茶に用いられ, さらに幕末に急須の使用が急拡大して「淹れる茶」の普及が始まった時点でブリキの茶筒が広く登場してきたと考えられるのである。茶の様相は, 時代的要素だけではなく, 地域性・階層性・多様性(例えば開始と普及の時期差など)を常に考慮する必要がある。それ故一筋縄ではいかず, 複眼的思考が常に求められる部分がある。その意味で内藤官八郎氏が残してくれたこの「摘要抄」の記事の重要性は計り知れないものがある。

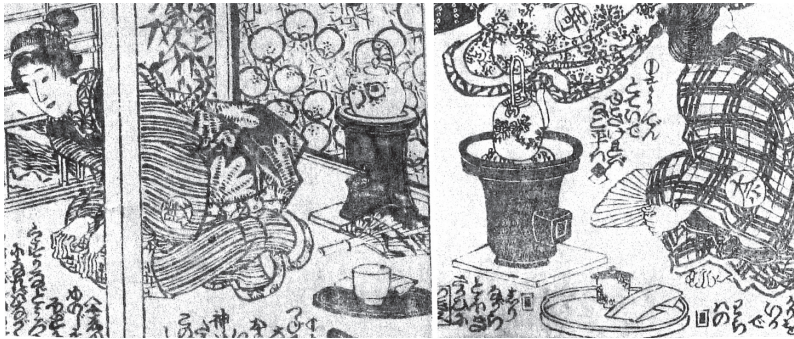


図12 左：柳下亭種員『童謡妙々車』十編上(安政6・7年〈1859・60〉刊)，右：柳煙亭種久『風俗浅間嶽』二編下(嘉永7年〈1854〉刊)ともに早稲田大学図書館蔵

小袋(紙袋)

本章では茶の容器について考察を加えたので、併せて葉茶屋(茶の販売店)が小分けして茶を売る際の袋に言及しておきたい。18世紀半ばに庶民に上茶が浸透し始めた頃、「煎茶も、宇治、しがらきの名茶は、下ぎまの吞事ならざりしに、小袋の安売り出、一服一銭といふ茶店



図13 東里山人『音曲情糸道』上編(文政3年〈1820〉刊)早稲田大学図書館蔵

出しより、辻売りの名茶、明和の頃(1764～1772年)より、通町を始、所々に腰掛茶や風流、宇治、しがらきの匂いふんぶんたり。」という状況が出現していた。⁽²⁴⁾『続飛鳥川』には「寛延の頃(1748～1751年)まで(茶焙じなし。納豆箱の底をぬき、紙をはりほいろとす。)角袋の茶なし。」と記す。⁽²⁵⁾まさに18世紀半ばの事であった。隠元葉罐の出現時期と合致する現象であった。この小袋は画像の例が乏しいが、現在の祝儀袋・不祝儀袋に類似した形のものを確認できる。⁽²⁶⁾(図12)こういうものは中身の茶葉も少量で、

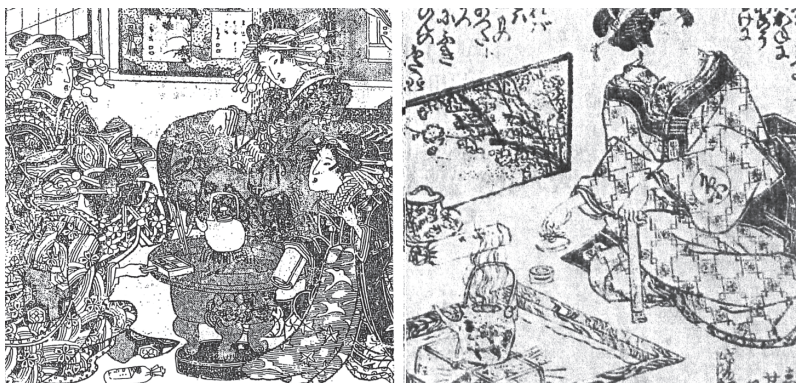


図14 左：鼻山人『契情肝粒志』口絵(文政10年(1827)刊)国立国会図書館蔵，右：
笠亭仙果『枕琴夢之通路』上冊(天保6年(1835)刊)九州大学附属図書館蔵

大きな容器に移し替えることは考えられない。早くに飲むか、或は長火鉢の側面の抽斗に暫時そのまま収めたのではなかろうか。図像としては図13などがこれに当たろうか。⁽²⁷⁾これには、柳田国男におもしろい描写がある。「私の播州の家などでも、煎茶といふものは客でもないかぎり、常にはほとんど買わずにゐるくらいであった。山の方の村から「たて」といふ、畳一帖より広いものをまるくした大きな袋に入れて擔いで来たのを、枡で計って買ひこみ、大きな壺に入れておいた。日ごろの使い分は、長火鉢の引き出しの一つに、底に紙をしいて、その中に焙じて入れておく。毎日少しづつ引き出しをあけて使ふわけである。」⁽²⁸⁾引き出しが茶入れになっていたわけである。また、⁽²⁹⁾現在も使われている、容量の大きい紙製の細長い筒状の袋も画像に見える。(図14)葉茶屋での販売用の袋そのもの(図1参照)と思われ⁽³⁰⁾る。

2. 茶焙じ

第1章で説明した通り、江戸期の茶葉は密封性に問題のある入れ物に入れられていたため、湿気が問題になっていた。そのため、飲用直前に焙っ

て湿気を飛ばす処置が必要とされていた。そのための道具が茶焙じである。煎茶書の大枝流芳『青湾茶話』（宝暦6年, 1756）では「余、多年茶を試みるに、よき茶は、炙る事少なくして、よく出る。あしき茶は、焙る事つよくせざれば出ず。あしき茶は、土器を用いてよくいるべし。又よき茶又唐茶などは、器物に厚紙をはりているべし。凡そ、いりかげんは、多年手なれざれば覚えがたし。あまり緩火にて久しくほうずれば、かえって香ぬくるもの也。」⁽³¹⁾とする。茶を焙じることが特にお茶の出方の善し悪しとの関連で語られている。そこには味わいの善し悪しの評価も含まれている。また、茶の香りにも注意が向けられている。越谷吾山『物類称呼』（安永4年, 1775）では「鑿 いりなべ 京にて、いりごら 大和及東国にてほうろく（略）常陸にて、ちゃほうじといふ。（略）いりが（ご）らは、土のやきなべといひて、今の制とは形かはりたる物也。」⁽³²⁾と記す。両者を突き合わせてみると、茶を焙じるとは昔は「あしき茶」を土鍋で焙じていたが、18世紀の半ばあたりで、おそらくは茶の上質化に合わせる形で、主流が「器物に厚紙を貼る」形のものに大きく変化していることが窺える。ただ、江戸期の「土の焼鍋」は残念ながら画像を確認できていない。確認できる画像資料は、木枠に厚紙を貼ったタイプのもので、18世紀半ばからのものがかなりの数で確認できている。

18世紀

現在、画像を確認できる茶焙じは、ほとんどが曲げ物の底に紙や金網などを貼ったものである。第1章でも引用した『続飛鳥川』には「寛延の頃（1748～1751）まで茶焙じなし。納豆箱の底をぬき、紙をはりほいろとす。」⁽³⁴⁾とあった。この茶焙じの画像としては、管見の限り、勝村春章の初期作とされる「六歌仙 喜撰法師」⁽³⁵⁾（明和期か）（図15）と鈴木春重「七小町 雨乞い」⁽³⁶⁾（明和6・7年頃, 1769・1770）、さらには鈴木春信「吉原美人合」⁽³⁷⁾（明和6・7年）（図16）あたりが最も古いものとなる。この時期に茶焙じの画像が初めていくつもまとまって登場することは『青湾茶話』・『続飛鳥川』の記載



図15 勝川春章『六歌仙・喜撰法師』(18世紀)個人蔵



図16 鈴木春信『絵本青楼美人合』第五卷(明和7年(1770)刊)千葉市美術館蔵

とも矛盾せず、隠元薬罐の登場時期ともほぼ合致している。それは決して偶然ではなく、茶のある段階での

上質化が始まった頃合いに茶焙じもまた出現してきたと解することができる。そして、18世紀の間の茶焙じの画像は、茶に関わる画像の総数はかなり多いにも関わらず、驚くほど少数(管見の限り、上述の3例を加えて9例ほど)⁽³⁸⁾にとどまっている。その点は、次の19世紀の状況とは大きく異なる。そのことが上茶の普及度合いと関連している可能性は高いと判断している。形態としては、長方形・羽子板状の角張ったものが7例と多く、丸形は2例で、丸形の2例は柄(持ち手)が確認できない。それを利便性が完全に備わっていない初期的な形態と解せるかどうかは今後の課題である。

19世紀

19世紀に入ると、茶焙じの画像は急激に増加する。これは上茶の普及、



図17 笠亭仙果『春服対佳賀紋』三編上巻(嘉永5年(1852)刊)国立国会図書館蔵

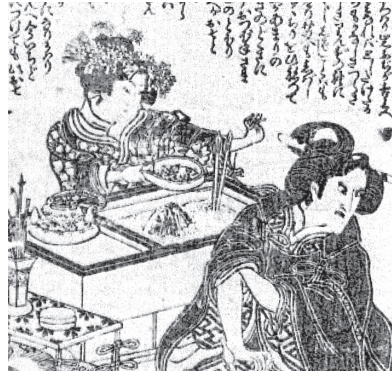


図18 山東京山『両面摺娘女時代鏡』後編上(文化12年(1815)刊)大阪府立中之島図書館蔵

遺物では土瓶の急増・急須の普及と期を一にする現象と思われる。明治までの70年弱の間に80例以上を確認している。第1章で紹介した3種の勝手道具尽類にもすべて登場している。一方で、幕末から明治に入ると画像数は激減している⁽³⁹⁾。これは急須の急増時期すなわち淹茶の普及・ブリキの茶入れ(茶筒)の普及と期を一にする現象と考えられる。今現在に至るまで、茶に関わるその状況はあまり変化していないので、我々も茶焙じを使わないことの意味合いを充分実感することができる。つまり、茶焙じの消長はひとえに茶の種類と飲用法と収納容器に連動していたと考えられるのである。

茶焙じの形態には3種類がある。一つは18世紀に見えた長方形乃至羽子板状のものである。中に十字形に木の棧が入るものが多い。実際に火の上で焙っている画像でもこの棧がみえる。ということはこれはどうも底に貼られた厚紙よりも上にあるようで、大きく描かれた図像で見るとむしろ蓋のようにすら見える⁽⁴⁰⁾。(図17)二種類目は、外枠が湾曲してテニスのラケット状になるもので、山東京山「両面摺娘女月代記」後編(文化12年, 1815)が管見の限り初出である。(図18)19世紀の新しい形と言える。3種類目は

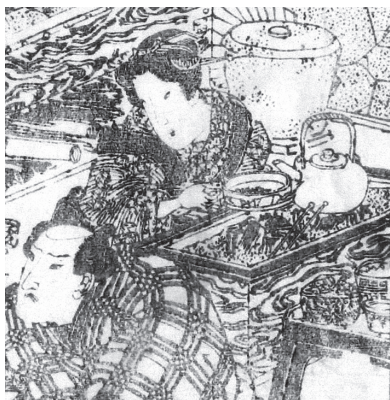


図19 為永春水『春宵美談三日月阿
専』巻四(文政9年(1826)刊)
早稲田大学図書館蔵

円形のものである。取っ手付きの円形はまだ18世紀の例では確認していない。このうち、底の厚紙が周囲に不整形にはみ出しているものは、図7にあるように、外枠の外側に別の籐をはめて止めるやり方と思われる。底に何かの接着剤を用いて貼るよりも、紙の取り換えにははるかに便利なやり方と言えよう。為永春水「三日月阿専」(文政9年, 1826)のもの(図19)が管見の限り最も古い例で、かなり進化した新しいやり方と言える。

『弘藩明治一統誌月令雑報摘要抄』

前章に引き続いて、「摘要抄」に言及したい。「摘要抄」にも茶焙じに関して記事・挿図がある。⁽⁴²⁾図20右には注して「茶ハウス 上下へ紙を張り此上にて茶を焙す 出口所あり」と記す。ラケット形に近いものであるが、

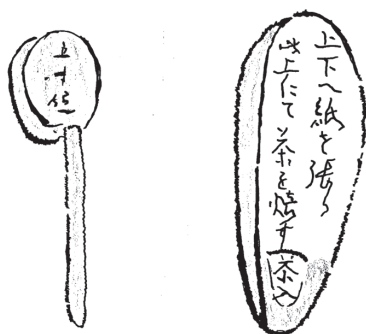


図20 内藤官八郎『弘藩明治一統誌
月令雑報摘要抄』左：茶焙じ(農
家)，右：茶焙じ 西村作図

かなり厚みがある。表現から見るとどうやら「茶入」と記された部分に出入り口があり、茶葉は上下の紙の間で焙じられたらしい。勝川春章画「百慕々語」に見えるものがこれに近い形と思われる。⁽⁴³⁾(図21)してみると、江戸のものに見えた四角形・羽子板状の茶焙じの木の枠は蓋の枠だった可能性が高くなる。また図20左には注して「農家にて用ふる茶ハウス 銅細工な

り」と記す。江戸の画像では類例が乏しいが、「北斎漫画」三編(文化12年, 1815)のものがこれに当たる可能性⁽⁴⁴⁾がある。

また、記事に着目してみると、茶焙じは前章で取りまとめた嘉永年間以前のAの部分で「茶ハウスと申者あり。農家は赤銅を用て仕用す。」と解説しているのみである。残念ながら嘉永以後の茶焙じについては記載がない。恐らく述べるほどの変化がなかったかと推察するが、正確には不明としか言いようがない。「摘要抄」に上述の内容と矛盾する要素がないことを示すため、一応の言及を行った。



図21 勝川春章『百慕々語』より(明和8年〈1771〉刊)西村作図

3. 茶漉し(茶筴)

茶汁に混じった茶のだしがらを漉し取るための小型の漉し器である。(図22)ただし、ほぼ同形のものが古くから漢方薬漉しに使われており、これは現在に至るまでも使用され続けている。茶に用いられるようになるのはどう考えても漢方薬よりは新しく、形の類似から見てその転用品と見るしかない。柳下亭嵐翠『煎茶早指南』(享和2年,

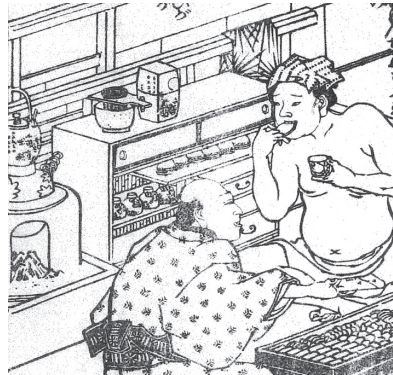


図22 山東京山『大晦日時代鏡』二十三編(安政2年〈1855〉刊)早稲田大学図書館蔵

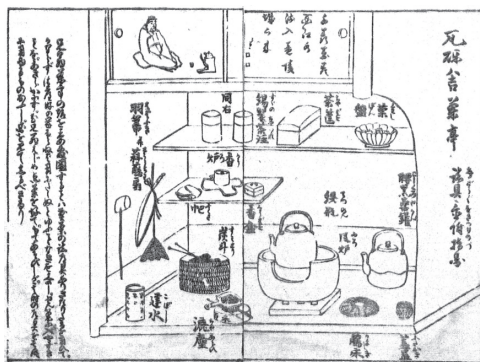


図23 柳下亭嵐翠『煎茶早指南』(享和2年
(1802)序刊)愛知県図書館蔵



図24 南仙笑楚滿人『繪本仇報妹背
扇』第二冊(文化3年(1806)刊)
国立国会図書館蔵

1802)には、嵐翠の兄がその瓦礫舎茶亭で用いた諸
道具の図がある。⁽⁴⁵⁾煎茶道
確立以前の混淆とした道
具が並ぶが、その中に漉
塵(ちゃあらい)と名づけら
れた茶漉しそっくりの道
具が見える。(図23中央下
辺)卓球のラケットの中心
を刳り貫いた中に茶筴を
はめ込んだような体裁の

もので、図22と瓜二つの形をしてる。
大枝流芳の煎茶書『青湾茶話』(宝
暦6年,1756)では、『茶譜』を引いて
「凡そ茶を煮るは、まず熱湯を以て
茶葉を洗い、塵垢を去り、気を冷
まして之を煮れば、則ち美し。」と
記している。⁽⁴⁶⁾そのための道具には
説き及んでいないが、漢方薬漉し
が転用されたことも十分考えられ
る。もしそうであれば、図22の茶
漉しは文人煎茶からの更なる転用
品ということも可能性は残りそう
に思う。

また、前々稿で考察した通り、こ
の茶漉しの中に新たな茶葉を入れ

て、そこに湯をかけて茶を作る「漉し茶」という茶の飲用法があるが、両
者の図像的識別は困難となっている。⁽⁴⁷⁾茶筴と茶漉しの区別は、手持ちする

ための柄のあるなしにある。柄のない茶筴の図像例は1例しか確認できていない。⁽⁴⁸⁾(図24)

この茶漉しの図像例は、茶入れ・茶焙じに輪をかけて少ない。文献的には俳諧二葉集(延宝7年, 1679)に「貸家住居もつつく松陰 茶こしめ⁽⁴⁹⁾せ栗津が原のあなた殿」とあるのが古い。画像としては勝川春好画

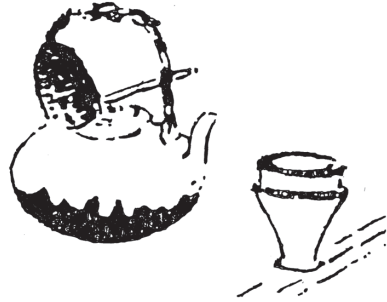


図25 勝川春好画『豆だらけ』より
(安永4年〈1775〉頃)西村作図

の艶本「豆だらけ」(安永4年,⁽⁵⁰⁾1775)よりも古い例を確認できていない。(図25)下等の番茶は大きな茶釜が中心で、そこでは次に述べる茶袋が専ら用いられる。上茶は18世紀半ばまでは庶民層にはごく僅かの時代である。18世紀後半で3例, 19世紀で11例ほどが認められる。僅かな例数しかないが、茶入れ・茶焙じと同様に、上茶の普及に沿う動きをしていると見てよいのではなかろうか。

4. 茶袋

茶袋には2種類のものがあるが、ここで取り上げるものは、葉茶を入れて茶釜の中に投じて、茶を煎じるときに用いる布袋のことである。まさに現在のティーバッグのようなもので、葉が釜の中で散らばらずに済み、便利なものと言える。古くに釜で茶を煎じるようになった当初から存在したと思われる。桃山時代の例は前稿で取り上げた「祇園社大政所参詣曼荼羅⁽⁵¹⁾図」に見えていた。ただ、「日葡辞書」には見えない。⁽⁵²⁾江戸期の例としては、井原西鶴の「俳諧大句数」に「曝した布の切も離さぬ 茶袋はぬふた所が⁽⁵³⁾おもしろい」と詠まれる。同じ井原西鶴の「好色二代男」にも「…遣い捨⁽⁵⁴⁾の茶袋に小糠を入れ、見るを見まねに明け暮れ洗う程に…」と見える。要するに番茶のような下級茶に用いられるわけで、『幕末下級武士の記録』

に「三食の時用ゆる茶は番茶と唱へ、一斤貳百文の茶を麻の袋え入れ、茶釜にて煎じ用ゆ。」⁽⁵⁵⁾というような使われ方をされていた。その生地に触れるものは少ない。

従って、茶袋はこの手の番茶と共に長く使われ続けている。小林四郎左衛門「幾利茂久佐」(安政4年, 1857)には「茶は番茶を茶釜に入て、朝より晩までごとごとと煮出し、姥孃の来れば五郎八といへる径四寸もある大茶碗へ茶袋を柄杓にてつつきつつき六分目も汲…」⁽⁵⁶⁾とする。このような使われ方をすればすぐに番茶の色に染まってしまうわけで、「茶袋を捨てるころもおち葉かな」⁽⁵⁷⁾(蕪村・新五子稿)ということになった。

もちろん長持ちはしないわけで、柳田国男の『茶の話』では、「…『茶ん袋』といふのに入れて、茶釜の耳についた金の輪に紐でしばりつけ、釜の湯がくらくら沸きると、そのしばりつけた茶袋を、そのまま放り込む。そして色の出た茶を茶杓で汲み出してのむようになっていた。湯がなくなれば、茶ん袋はそのままだに、いくらでもあとから足してわかしていった。そのため茶ん袋といふものは汚い茶色になってゐた。…」⁽⁵⁸⁾と記されている。文字通りの消耗品の扱いであった。本間遊清『耳敏川』には「房州にては正月の設に茶袋を作り。かけの魚とならへて掛おくとそ。」とあり、正月の準備として新しい茶袋をこしらえている。このことは、俳諧に「あたらしき茶袋ひとつ冬籠」・「茶袋の仕立ておろしや冬籠」などの句があることからも⁽⁶⁰⁾領ける。

5. 火鉢・七輪・焜炉

七輪・焜炉はともに可搬性の加熱器具で、火鉢の類ながら小型のものである。古くは庶民の茶を実際に作る場所は、茶店・一般家屋内を問わず、竈の上の釜の中であった。しかし、18世紀半ばになると、茶の上質化とともに茶を飲む場所だけではなく作る場所も屋内の一般座敷に持ち込まれることが増加してくる。大きな釜で安い番茶類をごとごと煮るだけではない

時代が到来していた。火鉢・七輪以下はそのための道具となっていた。⁽⁶¹⁾その時期は明和・安永期あたりで、上茶が普及し始めた時期とほぼ重なっている。ただし、火を焚く加熱器具が室内に持ちこまれるのはそれよりも早く、漢方薬を病人の近くで煎じる画像が18世紀前半に確認できる。茶を煎じる画像は、ここでも漢方薬よりも後出と考えざるをえない。

18世紀の室内で茶を煎じている画像を通観して見ると、その大半は火鉢・七輪の類であり、より小型の焜炉類は確実なものは3例しか確認できない。⁽⁶²⁾(図26)焜炉の喫茶具としての器具化が極めて遅かったことが推察できる。しかもその3例の加熱器具の上に乗るものはいずれも薬缶よりは小型の急須であり、火鉢・七輪より小型の焜炉類は急須とのセットとして出現した、つまり急須専用の加熱器具だったと言える。



図26 上田秋成『諸道聴耳世間猿』
五之巻(明和3年(1766)刊)早稲
田大学図書館蔵

たと言える。いまここで「焜炉」と記したものは、当時も「こんろ」と呼称されたようである。夢中山人『南閨雑話』(安永2年,1773)では、お茶にまつわる話が続く中で、「…あんどうをそっちへやつて。こんろへすみを⁽⁶³⁾ついで。いつて寐や。…」と記す。また、蓼太編俳諧『七柏集』(天明元年,1781)では「茶漬支度の焜炉急火焼」の句がある。⁽⁶⁴⁾

19世紀に入るとお茶にまつわる様相は大きく変化する。寛政期あたりから姿を見せていた大型の箱火鉢が増加してくる。⁽⁶⁵⁾湯を沸かす際にも、茶を煎じる際にも、或は沸かした湯を土瓶・急須に注ぐ際にも、箱火鉢とその周辺が中心的役割を担っていくようになる。一方、より小型の焜炉の類は享和期以降も継続的に確認できる。上に乗るものがほとんど急須である点も変わらないが、数量的には決して多くなってはいない。箱火鉢と比して



図27 石川雅望『絵本狂歌百人一首』（文化6年〈1809〉刊）国立国会図書館蔵

はかなり少数にとどまっている。焜炉の上に直接茶を作る急須を乗せてしまうと、そのお茶は煮茶・烹茶となって淹茶にはならない。塩屋艶二『標客 三舂誌』（享和2年序、1802）には「(客)春野(人名)やそのうちノ。茶を仕掛けやよ。(春野)アイト立てコンロキビショウに



図28 三代歌川豊国『歌之助』（名伎三十六歌仙より）（文久元年〈1861〉刊）国立国会図書館蔵

てせんじ茶をしかける。」とあり、茶が文字通り「煎じ」⁽⁶⁶⁾られている。従って前稿で示した通り、19世紀に次第に淹茶化が進行してゆく中では焜炉の出番は相当限られたものに留まらざるを得なかったはずである。事実、数はさほど多くはならず、しかも急須の数量が急速に増加する(つまり淹茶化が急激に進展する)幕末期(特に慶応期)以降には、焜炉は数を減じている。そして明治20年以降(1887～)はほぼ姿を消している。この頃に淹茶化の完了、つまり、お茶に関わる有り様が現在の我々のお茶と同じ有り方に完全に変化したと言い換えることが可能であろう。



図29 山東京伝『松梅竹取談』巻之二(文化6年〈1809〉刊)大阪府立中之島図書館蔵



図30 式亭三馬『其写絵劇俳』巻之四(文化7年〈1810〉刊)大阪府立中之島図書館蔵

焜炉の形としては、丈が低く口径が比較的大きいもの(図27)と、丈が高くタワーのようなスタイルと

なり、口径が小さいもの(図26)が認められる。数量的には丈の高いものが三分の二ほどを占めている。また、両者に共通する現象として、特に丈の高いものを主として、外側面に絵画や書(詩文)などの図柄が入れられた例が認められる。(図28)茶入れと同様に、これも煎茶道とのかかわりが意識される。この図柄入りの焜炉の初現は文化年間である。書入りのものでは、山東京伝⁽⁶⁷⁾『松梅竹取談』(文化6年, 1809)(図29)や山東京山⁽⁶⁸⁾『奴勝山愛玉丹前』(文化8年, 1811)あたりが古く、絵入りのものとしては、浅草庵市人編⁽⁶⁹⁾『狂歌六々藻』(文化12年, 1815)を確認している。

一方、煎茶道においても絵・書(詩文)入りの焜炉は間違いなく使用されていた。たとえば、井関隆子⁽⁷⁰⁾『井関隆子日記』(天保11年～, 1840～)や中村経年⁽⁷¹⁾『松亭漫筆』(嘉永3年, 1850)などでは、湯沸しのキビシヨウだけでは

なく、急須も同様に絵入りの焜炉の上に乘せられている。時期的に古い例としては、式亭三馬『其写絵劇俤』巻四(文化7年, 1810, 大坂府立中之島図書館蔵)に掲載される柳下亭嵐翠『煎茶早指南』の出版広告に、キビシヨウではなく急須の方を乗せた絵の図柄の入った焜炉が見えている。(図30)従って、確認した資料からは、煎茶道と庶民の茶のどちらがより先行して使用していたのかは明確な判断が今の所つけられないでいる。

終わりに

以上、江戸時代のいくつかの喫茶具を取り上げて、その消長を確認してみた。ほとんどのものが、庶民の茶の上質化の過程の中で、茶自体の変化に伴って有無・役割・形態などを変化させていた。もちろんそのことが、庶民の茶の茶葉そのものと飲用方法に興った変化を密接に反映したものであることには疑問の余地がない。今回、テーマとして取り上げた各種喫茶道具は、喫茶の中で占める役割はあくまで脇役に留まるものではあるが、そこに見えてくる様相は明確に主役の変化に呼応したものであったと言える。その意味で、冒頭に記した通り、本論は筆者の庶民の茶の上質化の過程に関わる所論の裏付け・傍証となりえたのではないかと考えている。

注

- (1) お茶の飲用法に関しては以下の論考を参照されたい。
西村俊範「笠森お仙と隠元薬罐」『人間文化研究』第32号(2014年)
西村俊範「江戸後期庶民のお茶」『人間文化研究』第37号(2016年)
西村俊範「桃山～江戸中期、庶民のお茶」『人間文化研究』第39号(2017年)
- (2) 高市志友他編『紀伊国名所図会』後編巻六(『版本地誌大系』9, 1996年)747頁
- (3) 西邨貞『幼学読本』(明治20年, 1881)
- (4) 類例として以下のものがある。
・菱川師宣「吉原恋の道引」(近世文学書誌研究会編『遊女評判記集(中)』近世文学資料類従仮名草子編第35所収, 1978年)284頁

- ・菱川師宣「和国百女」17葉裏(日本古典文学会・東洋文庫『菱川師宣絵本』494頁, 岩崎文庫貴重本叢刊第5巻所収, 1974年)
- (5) 類例として以下のものがある。
 - ・天和元年(1681)―「都風俗鑑」(日野龍夫・中村幸彦編『新編稀書複製会叢書』第3巻所収, 1989年)81頁
 - ・貞享3年(1686)―井原西鶴「好色一代女」巻六(岩波古典文学大系『西鶴集(上)』所収, 1957年)438頁
 - ・貞享4年(1687)―「奇異雑談集」巻2(朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成』21巻所収, 1998年)295頁
 - ・元禄7年(1694)―井原西鶴「西鶴織留」巻4(岩波古典文学大系『西鶴集(下)』所収, 1960年)414頁
 - ・元禄11年(1698)―西沢一風「新色五巻書」巻2(『西沢一風全集』第1巻所収, 2002年)31頁なお、鈴木春信『風流六歌仙 喜撰法師』の茶作りの場面では、漆器と思われる黒塗りの大型箱に「初緑」の茶銘の札を貼ったものが、「喜撰」の茶銘札を貼った茶壺の隣に並んでいる。明らかに茶箱として使用されている。町田市立国際版画美術館カタログ『江戸の華 浮世絵展』(1999年)図版24
- (6) 類例として以下のものがある。
 - ・安永7年(1778)―神真人序「大御世話」(武藤禎夫・岡雅彦編『嘶本大系』第11巻所収, 1979年)265頁図4
 - ・天明4年(1784)―北尾政美画「一つ星大福長者」(三谷一馬『江戸見世屋図聚』, 2015年)391頁
 - ・天明7年(1787)―秋里籬島「拾遺都名所図会」中巻2(京都叢書刊行会『京都叢書』第43, 1916年)218頁。野間光辰ほか『新修京都叢書』第7巻(1968年)218・219頁
 - ・寛政元年(1789)―山東京伝「真実情文桜」(山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第2巻所収, 1993年)19頁
- (7) 田辺昌子『江戸へようこそー浮世絵に描かれた子供たち』(2014年)188頁 図版205
- (8) 入間市博物館カタログ『お茶と浮世絵』(1997年)24頁
- (9) 森銑三ほか編『随筆百花苑』第3巻所収(1980年)261頁。三谷一馬『江戸見世屋図聚』(2015年)243頁
- (10) 三松館主人『民家日用 広益秘事大全』(嘉永4年, 1851)(江戸時代女性文庫16所収, 1994年)
- (11) 平松洋『奇想の天才絵師 歌川国芳』(2011年)108頁
- (12) 墨川亭雪麿『宇治拾遺煎茶友』(天保5年, 1834)中巻扉絵, 早稲田大学図書館蔵

- (13) 為永春水『春宵月の梅』（天保13年, 1842）巻14, 御茶ノ水女子大学附属図書館蔵。三谷一馬『江戸庶民風俗図絵』（2007年）159頁。なお、三谷一馬氏が模写して掲載した挿図では、この茶箱の装飾文様が省略されている。原本には絵が見える。
- (14) 歌川芳虎「あづまの花 江戸絵部類」嘉永年間切抜絵, 国立国会図書館蔵
- (15) 柳亭種彦『邯鄲諸国物語』13編下（嘉永4年, 1851）, 大阪府立中之島図書館蔵
- (16) 高市志友他編『紀伊国名所図会』後編巻六（嘉永4年, 1851）（『版本地誌大系』9所収, 1996年）746・747頁。三谷一馬『江戸商売図会』（1995年）168・169頁
- (17) 内藤官八郎『弘藩明治一統誌月令雑報摘要抄』（明治30年頃, 1897頃）（谷川健一ほか編『日本庶民生活史料集成』第12巻所収, 1971年）292頁。この「摘要抄」は、内藤官八郎氏（天保3年～明治35年）が文政期から明治期までの四民生活諸相を筆者の体験を通して述べたものである。
- (18) 清談楼主人『新撰煎茶一覽』（弘化4年, 1847）45葉表。大阪府立中之島図書館蔵
- (19) 小川可進『喫茶辯』（安政4年刊, 1857）にも「茶貯の器は、……近頃来ブリキを用うれども、永く貯うること成りがたし。……茶は銅・鉄を忌む。ブリキの地生は鉄にて、上に錫を延べたるものなれば、至極のものにては無きなり。」と記す。小川可進『喫茶辯』茶生（林屋辰三郎ほか編注『日本の茶書2』所収, 東洋文庫, 1972年）286頁
- (20) ・三遊亭円朝「花菖蒲沢の紫」乙編中第9回（明治8年か, 1875）（佐藤至子他考証『円朝全集』別巻巻2所収, 2016年）222頁
・明治時代の「風俗画報」の図版（国書刊行会編『目で見る江戸・明治百科 明治時代四季の行楽・博覧会の巻』所収, 1996年）107頁。なお、秋田・角館の樺細工は大正時代からのものである。
- (21) 注17前掲書291・292頁
- (22) 注21に同じ
- (23) 注1 西村2016年前掲論文
- (24) 越智久為「反古染」（寛政7年, 1795）（水谷不倒・朝倉無声編『続燕石十種』第1巻所収, 明治41年, 1980年再刊）218頁
- (25) 作者不詳『続飛鳥川』（文化7年以降, 1810～）（日本随筆大成編集部『日本随筆大成』第2期第10巻所収, 1974年）30頁
- (26) 以下の例を確認している。
・嘉永7年（1854）一柳煙亭種久「風俗浅間嶽」2編下, 早稲田大学図書館蔵, 図11右
・安政6又は7年（1859又は1860）一柳下亭種員「童謡妙妙車」10編上, 早稲

田大学図書館蔵, 図11左

- ・安政7年(1860)―三亭春馬「花封苔玉章」3編上, 大阪府立中之島図書館蔵
- ・慶応2年(1866)―柳亭種彦「七不思議葛飾物語」6編上, 早稲田大学図書館蔵

なお、漢方薬を煎じる場面でも良く似たものが描かれるので、正確に識別する必要がある。

- (27) 文政3年(1820)―鼻山人「音曲情糸道」上編, 早稲田大学図書館蔵
- (28) 柳田国男「茶の話」『定本柳田国男全集』別巻第三(1971年)177頁
- (29) 以下の例を確認している。
 - ・文政6年(1823)―笠亭仙果「枕琴夢之通路」上冊, 九州大学附属図書館蔵, 図14右
 - ・文政10年(1827)―鼻山人「契情肝粒志」口絵5(村上静人『契情肝粒志』人情本刊行会第3輯所収, 1923年), 図14左
- (30) 葉茶屋に見える例として以下のものを確認している。
 - ・嘉永4年(1851)―高市志友他編「紀伊国名所図会」後編巻6, 注16に同じ
 - ・明治30年―三遊亭円朝「両後の残月」第3席の4(読売新聞初出, 中丸宣明ほか校注『円朝全集』第11巻, 2014年)229頁
 - ・明治期―教育画(葉茶屋)東京都立図書館蔵
- (31) 大枝流芳『青湾茶話』(宝暦6年, 1756)(東洋文庫『日本の茶書2』所収, 1972年)82・83頁。
- (32) 例えば, 山東京伝「金々先生造化夢」では, 「これ長松仙人, 茶の焙じやうが悪いぞ, それでは苑香がない。」とある。『黄表紙廿五種』(日本名著全集第1期第11巻)516頁。
- (33) 越谷吾山『物類称呼』(安永4年, 1775)(岩波文庫所収, 1941年)118・119頁。なお, 松平定信は「茶の古くなりて, しつのにほひ入りたるには, せいろうの如きものへ茶を入, にんにくを一つなかへ入れ, 文火にてむせば忽ちにはへさる。」と記している。ほかに類似の記載を見ない。松平定信『退閑雑志』巻之四(寛政5～12年の間, 1793～1800)(『日本随筆全集』第14巻所収, 1928年)213頁
- (34) 注25前掲書に同じ
- (35) 勝川春章「六歌仙 喜撰法師」(江戸東京博物館カタログ『錦絵の誕生―江戸庶民文化の開花』所収, 1996年)四―52
- (36) 『秘蔵日本美術大観』第12巻(1994年)図版13
- (37) 黒川真道『日本風俗図絵』第8輯(1915年)161頁。千葉市美術館カタログ『青春の浮世絵師―鈴木春信』(2002年)252頁図版258
- (38) 以下の例を確認している。

- ・安永8年(1779)―市場通笑「大通人穴さがし」(『黄表紙 市場通笑集』第3巻所収, 2006年)91頁
- ・安永9年(1780)―神真人序「大御世話」(武藤禎夫・岡雅彦『嘶本大系』第11巻所収, 1979年)264・265頁。図4
- ・天明8年(1788)―落咄「下司の智慧」(武藤禎夫『江戸風俗絵入り小咄を読む』所収, 1994年)101頁
- ・天明年間―鳥居清長画「好色末摘花」(西原亮ほか『川柳末摘花輪講』四編所収, 1997年)358頁
- ・寛政2年(1790)―芝全交「遊妓寔卵角文字」(『黄表紙・川柳・狂歌』日本古典文学全集第46所収, 1971年)195頁
- ・寛政年間―深川流女某「部屋三味線」(尾崎久弥編『洒落本集成』第2集所収, 1929年)159頁。洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第19巻所収, 1983年75頁)
- (39) 明治28年の「新版座敷道具尽」にも見えていて、無くなったわけではないことが確認できる。注8入間市博物館前掲カタログ24頁
- (40) 笠亭仙果「春服対佳賀紋」(嘉永5年, 1852)(国立劇場調査養成部編『春服対佳賀紋』正本写合巻集13所収, 2014年)122頁
- (41) 為永春水「三日月阿專」巻4(文政8, 1825)(村上静人編『三日月阿專・娘太平記操早引・籬の花』人情本刊行会第20集所収, 1924年)83頁
- (42) 注17内藤前掲書290・291頁
- (43) 林美一編『春章』(『江戸艶本集成』第3巻, 2012年)319頁
- (44) 永田生慈『北斎漫画(一)』(1986年)86頁
- (45) 柳下亭嵐翠『煎茶早指南』(享和2年, 1802)(東洋文庫『日本の茶書2』所収, 1972年)230・231頁
- (46) 注31前掲書84頁
- (47) 喜田川守貞『守貞謄稿』巻五(嘉永6年, 1853)「又毎客新に茶を煮るものもあれども、多くは漉茶と号け、小箆の内に茶葉を納れ、沸湯を掛るなれども、京坂の煎茶の宿煮より遥かに勝れり。」
- (48) 南仙笑楚満人『絵本仇報妹背扇』第2冊(文化3年, 1806), 国立国会図書館蔵。
- (49) 杉村西治『二葉集』(延宝7年, 1679)(飯田正一ほか編『談林俳諧集(一)』古典俳文学大系3所収, 1971年)515頁
- (50) 武藤禎夫『安永期艶笑嘶本六種』(2000年)86頁
- (51) 漆間元三『続振り茶の習俗』(2001年)口絵
- (52) 土居忠生ほか編訳『日葡辞書』(1980年)117頁
- (53) 井原西鶴『俳諧大句数』第8(延宝5年, 1677)(穎原退蔵ほか編『定本西鶴全集』第10巻所収, 1954年)274頁

- (54) 井原西鶴「好色二代男」巻1(貞享元年, 1684)(富士昭雄ほか校注『好色二代男・西鶴諸国ばなし・本朝二十不孝』新日本古典文学大系76所収, 1991年)30頁
- (55) 山本政恒『幕末下級武士の記録』(1985年)383頁。三谷一馬『新編江戸見世屋図録』(2015年)243頁
- (56) 小林四郎左衛門「幾利茂久佐」(安政4年, 1857)(宮本常一ほか編『日本庶民生活史料集成』第3巻所収, 1969年)717頁
- (57) 蕪村明和5年の句。尾形仿ほか校注『蕪村全集』第1巻(1992年)71頁。なお、此の句の「落ちば」には、茶褐色の木々の「落ち葉」と、同じく茶褐色の茶袋から捨てられたこれまた茶褐色の「落ち(た茶)葉」が言語的にも色彩的にも映像的にもシンクロされて表現されていると解するべきであろう。
- (58) 注28柳田前掲書177頁
- (59) 本間遊清「耳敏川」巻7(文化15年, 1818)(愛媛大学国語国文学研究室編『み々と川(下)』愛媛大学文学資料集6, 1993年)101頁
- (60) 荷兮撰「春の日」(貞享3年, 1686)(神田豊穂『蕉門俳諧前集』日本俳書大系第2巻所収, 1926年)81頁。周東撰「ゆめのあと」下巻(宝暦12年, 1762)(中村俊定編『近世俳諧資料集成』第4巻所収, 1976年)79頁
- (61) 享保7年—江島其磧・八文字自笑『舞台三津扇』巻三 国立国会図書館蔵 享保21年—江島其磧『諸商人世帯気質』六之巻(大橋新太郎『続気質全集』帝国文庫40所収, 1896年)93頁
- (62) 注1 西村2016年論文106頁において、急須形のものの初現例として、ゑいじ『酒徒雅』を挙げたが、これは享保3年(1718)刊ではなく享和3年(1803)刊の誤りで、全く不適切な例であった。筆者の資料の転記ミスで、誠に申し訳ない。お詫びして訂正しておきたい。なお、急須形のものの初現例は、図26の上田秋成『諸道聴耳世間猿』(明和3年, 1766)となる。中村幸彦他編『上田秋成全集』第7巻所収(1990年)114・115頁
- (63) 夢中山人『南閨雑話』(安永2年, 1773)(洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第6巻所収, 1979年)57頁
- (64) 蓼太編『七柏集』(天明元年, 1781)(鳥居清・山下一海校注『中興俳諧集』古典俳文学大系13所収, 1975年)252頁
また、滝澤馬琴『羈旅漫録』(享和3年, 1803)にも「京都の陶は、栗田口よろし。清水はおとれり。……大坂兼葭堂このみのこんろきうす等を製す。」とある。(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第1期第1巻所収, 1975年)242頁
- (65) 長方形の大型の箱火鉢の初現としては、寛政元年(1789)のものを確認している。山東京伝『真実情文桜』(山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第2巻所収, 1993年)19頁。正方形のものでは、天明4年(1784)・天明7年

- (1787)のものがある。山東京山『敵討貞女鑑』巻中(大阪府立中之島図書館蔵)・黄表紙『敵討末勝山』の表紙絵(棚橋正博『黄表紙総覧 図録編』, 日本書誌学大系48-5 所収, 2004年)281頁
- (66) 塩屋艶二『標客 三鉢誌』(洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第21巻所収, 1984年)256頁
- (67) 山東京伝『松梅竹取談』(山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第7巻所収, 1999年)337頁
- (68) 山東京山『奴勝山愛玉丹前』(高木元編『山東京山伝奇小説集』江戸怪異綺想文芸大系4 所収, 2003年)422・423頁
- (69) 浅草庵市人編『狂歌六々藻』(『思文閣古書資料目録』第240号所収, 2014年)図版119
- (70) 井関隆子『井関隆子日記』(板橋区立郷土資料館カタログ『長崎唐人貿易と煎茶道』, 1996年)図版67
- (71) 松亭金水(中村経年)『松亭漫筆』巻上(『日本随筆全集』第8巻所収, 1927年)766・767頁。日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第3期第9巻(1977年)324・325頁。注70前掲カタログ図版54

【追記】

115頁において、「江戸期の土の焼鍋は画像を確認できていない」と記したが、校正中に例を見出したので記しておく。「常に葉をかかし茶をほうじて」用いるものとされるが、画像では節分の豆を炒っている。

山岡元隣「宝蔵」煎瓦(いりがはら)の条(寛文11年, 1671)(小高敏郎他校注『貞門俳諧集(二)』, 古典俳文学大系2 所収, 1971年63頁)